

口永良部島の火山活動解説資料（平成 25 年 4 月）

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

火山活動に特段の変化はなく、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められませんが、新岳火口内では噴気活動が続いており、火山灰等の噴出する可能性があります。また、火口付近では火山ガスに注意してください。

平成 24 年 1 月 20 日に噴火予報（噴火警戒レベル 1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 4 月の活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図 1、図 3-①⑥）

新岳火口の噴煙活動に特段の変化はなく、白色の噴煙が概ね火口縁上 50m で経過し、最高で火口縁上 100m まで上がりました。

・地震や微動の発生状況（図 2、図 3-②③⑦⑧）

火山性地震の月回数は 133 回（3 月：77 回）と少ない状態で経過しました。震源は、新岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

振幅の小さな火山性微動が時々発生しました。火山性微動の継続時間の月合計は 51 分（3 月：3 時間 20 分）で、前期間と比べ減少しました。

・地殻変動の状況（図 3-④、図 4、図 5）

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 25 年 5 月分）は平成 25 年 6 月 10 日に発表する予定です。

※この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学及び独立行政法人産業技術総合研究所のデータも利用して作成しています。資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています。



図1 口永良部島 噴煙の状況（4月18日、本村西遠望カメラによる）
 白色の噴煙が概ね火口縁上 50m以下の高さで経過しました（最高 100m）。

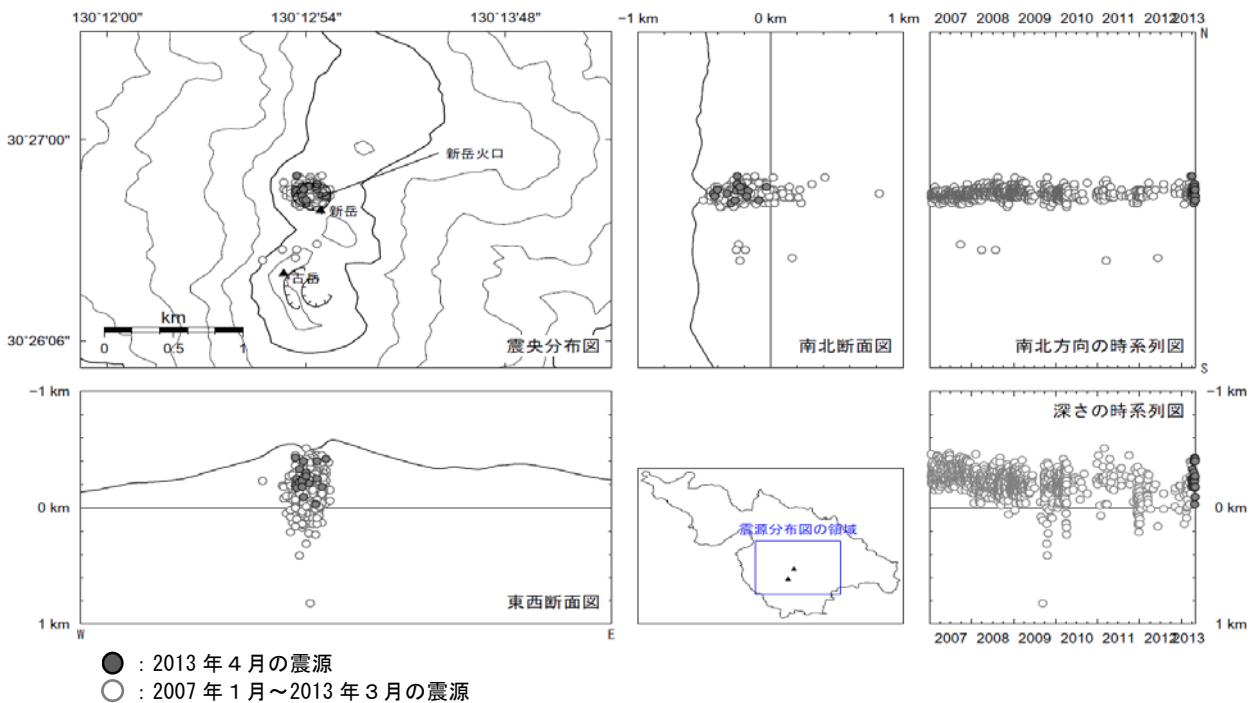


図2※ 口永良部島 震源分布図（2007年1月～2013年4月）
 < 4月の状況 >
 震源は、新岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

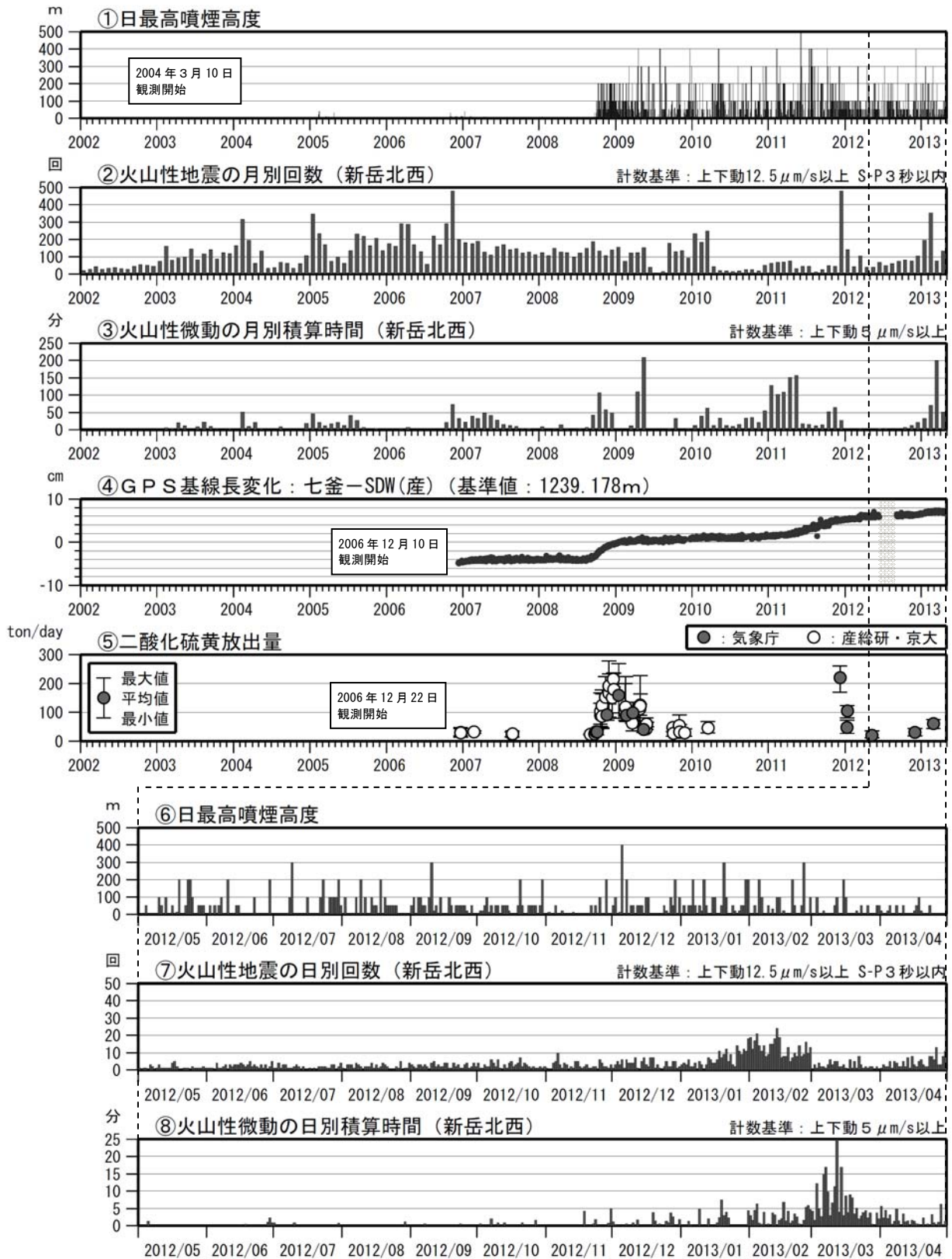


図3※ 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2013年4月）

< 4月の状況 >

- ・ 白色の噴煙が概ね火口縁上 50m で経過し、最高で火口縁上 100m まで上がりました。
- ・ 火山性地震の月回数は 133 回（3 月：77 回）と少ない状態で経過しました。
- ・ 振幅の小さな火山性微動が時々発生しました。火山性微動の継続時間の月合計は 51 分（3 月：3 時間 20 分）で、前期間と比べ減少しました。

図中④の基線は図5の①に対応しています。灰色部分は観測点障害のため欠測を表しています。2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。

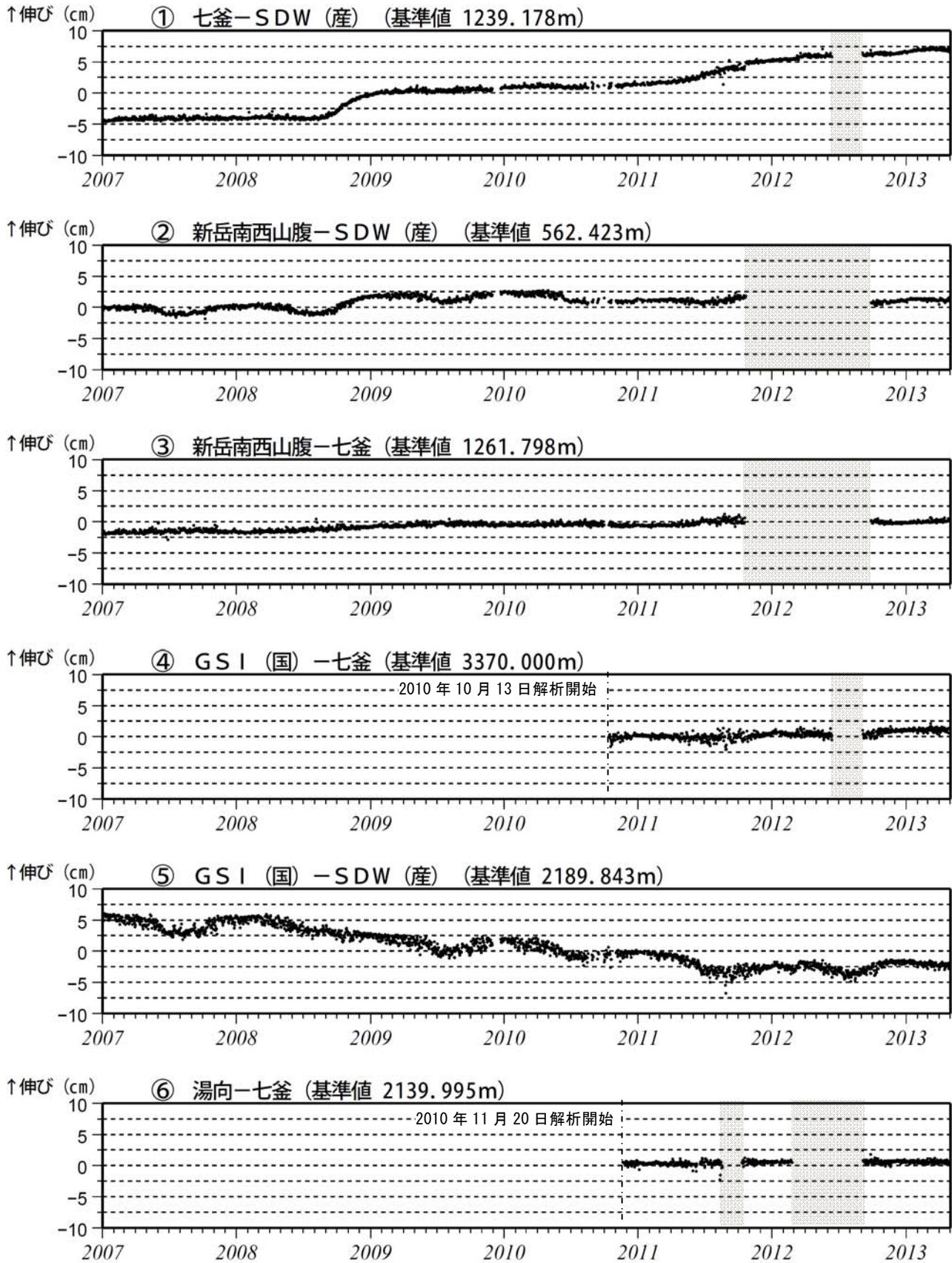


図 4-1※ 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化 (2007 年 1 月～2013 年 4 月)
GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

2010 年 10 月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。
これらの基線は図 5 の①～⑥に対応しています。灰色部分は観測点障害のため欠測を表しています。

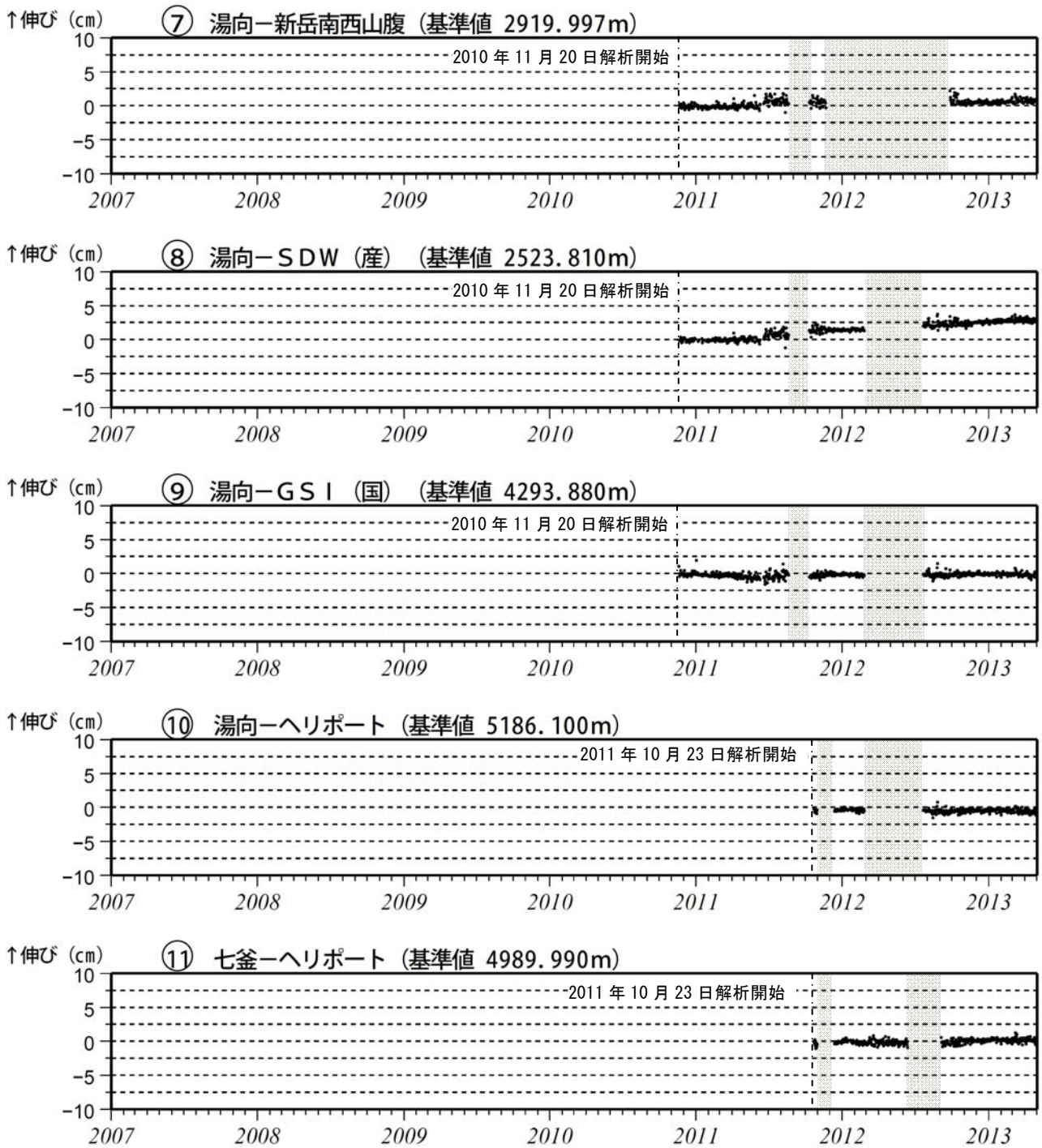


図 4-2※ 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化（2007 年 1 月～2013 年 4 月）

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

2010 年 10 月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。
これらの基線は図 5 の⑦～⑪に対応しています。灰色部分は観測点障害のため欠測を表しています。

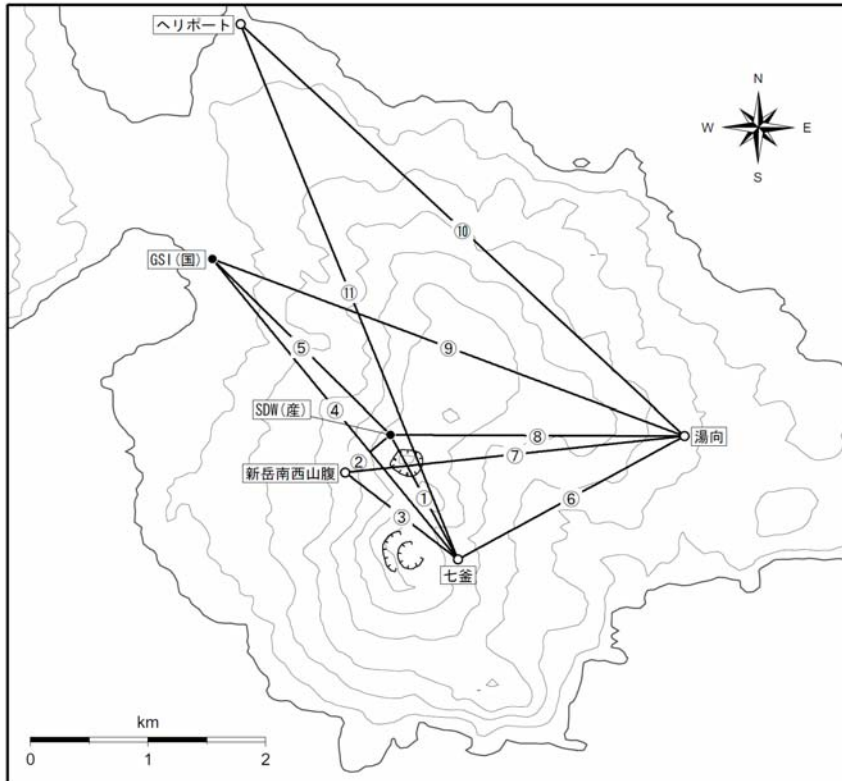


図5 口永良部島 GPS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(産)：産業技術総合研究所

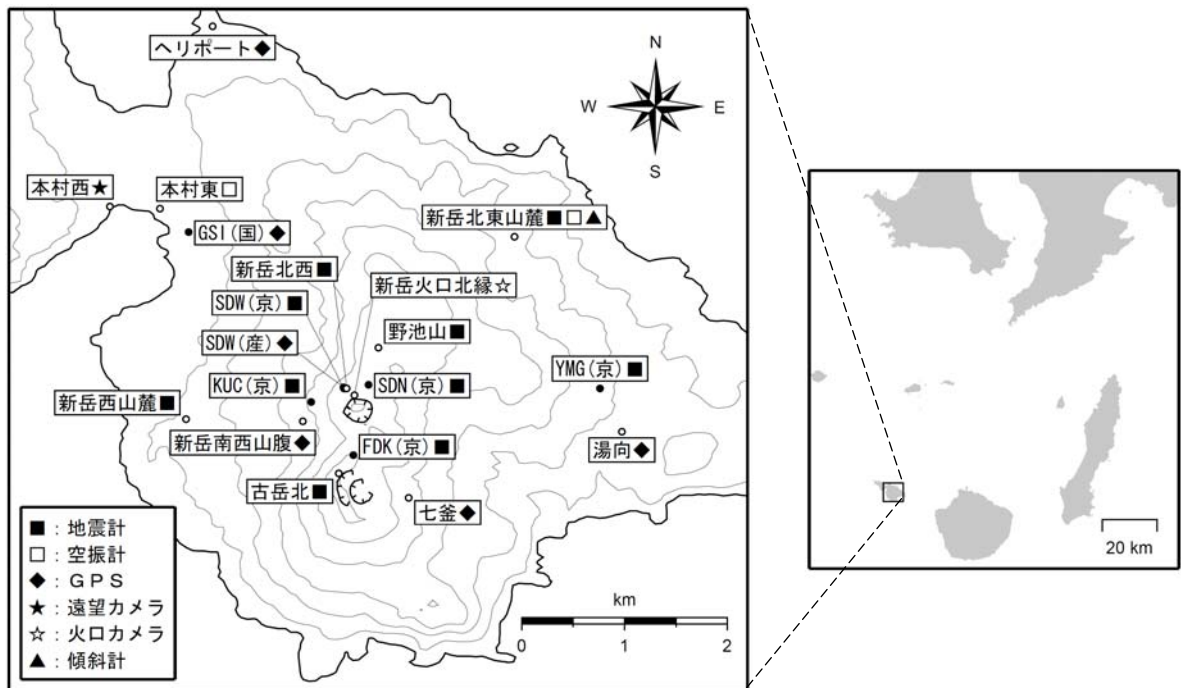


図6 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(京)：京都大学、(産)：産業技術総合研究所